

黄表紙における竜宮描写

関原 彩

はじめに

竜宮とは、仏教の概念で深海の底にあるという竜王の宮殿を指すが、現在では浦島説話によって一般的なイメージが形成されていると言えるだろう。拙稿「竜宮城はどこにある？」⁽¹⁾では、そうしたイメージを相対化するべく、竜宮城の場所、もしくはその入り口となる場所がどこにあるかという視点で、様々な文献にあたって調査した。

中国では仙郷と融合して考えられたため、洞庭湖や太湖などの湖が竜宮と通じているとされた。日本においては、依藤太が琵琶湖の瀬田橋付近から竜宮へ行ったという話や、謡曲「海人」の志度の浦から海女が竜宮へ行ったという話がよく知られている。この他にも『平治物語』などの軍記物で、箕面の滝や布引の滝から竜宮へと赴いた話が描かれており、中世までの竜宮は、主に畿内を中心とした場所に考えられていたことがわかる。しかし近世に入ると、竜宮へ繋がると考えられていた場所は全国各地で見られるようになり、東は隅田川、箱根、天竜川、諏訪湖といった場

所から、西は長門峡、琉球まで広がった。

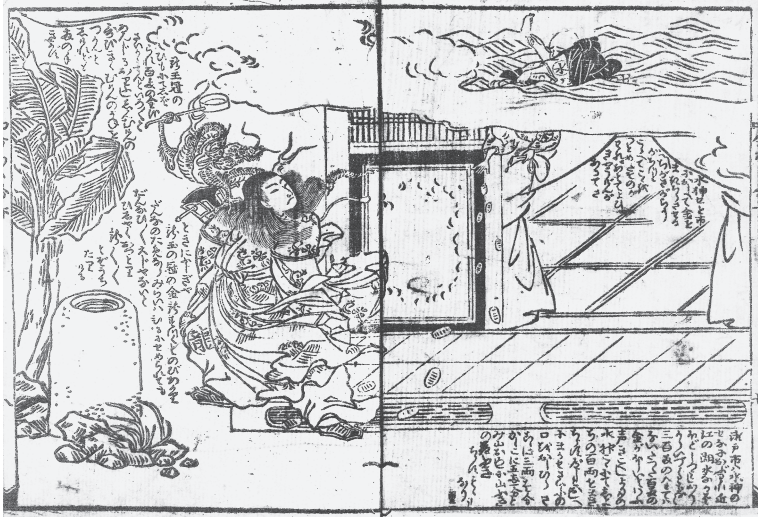
近世の例として前稿で主に取り上げた随筆や浮世草子からは、竜宮の空間的広がりという近世的特徴が浮かび上がってきた。本稿では戯作者たちの発想の源を明らかにするべく、黄表紙の用例を見ていきたい。⁽²⁾黄表紙を中心とした草双紙では、様々な昔話を組み合わせた後日談やパロディの中に竜宮がよく描かれており、江戸期の人々の発想のあり方が見えてくるのである。

第一章 具体的な場所―物語や伝承を引き継ぐ

(一) 琵琶湖

まず、物語や伝承を引き継いだ具体的な場所の例を見ていこう。御伽草子などで語られた俵藤太の伝説から、琵琶湖は竜宮へと繋がっていたと考えられていたことがわかるが、『其昔 竜神噂』⁽³⁾（恋川春町作画、天明四年（一七八四）刊）でも近江の湖水から竜宮へ行くという場面が登場する。座頭の瀬戸都は金貸しをしていたが、ある時人に騙されて金を持ち逃げされてしまう。困っているところへ旅僧が来てこれを聞き、一夜の宿を貸してくれるならこの難を逃れる方法を教えてくれるという。そして米二斗を炊いて振る舞うように言われて出すと、僧は残さずに食べ、そのお礼についてくるようにと言う。そして僧は以下のように語るのであった。

我は真は人間にあらず、近江の湖水の水神也。然るに竜宮の竜王難儀のことある間、これを救ひ給はゞ、行末富貴の身と栄へ、御身の望みも叶ふべし。我知らせを待つて、残りし百両の金を無性に投げ散らし玉へよ。



【図1】『其昔竜神噂』7ウ8オ 東京都立中央図書館加賀文庫所蔵

実は旅僧は近江の湖の水神であり、竜王の難儀を救おうと瀬戸都を竜宮に連れて行き、持っていた百両を投げて救って欲しいと頼むのであった。挿絵には水神である僧が瀬戸都を肩車し、肩まで水に浸かって湖水を進んでいく様子が描かれている。

一方竜宮では、竜神の息子の竜王が金に困って手水鉢を柄杓で叩いていた。そこに水神に背負われた瀬戸都が来て、水神の教えに任せて財布の口を押し開き、百両を撒き散らすのである。挿絵では、無間の鐘の見立てとなった竜王の上部に水面が見え、瀬戸都と水神が描かれている【図1】。瀬戸都は袋から小判を出して撒いているが、水面から顔を出した水神に手足を押さえられているという不思議な光景が描かれている。これは琵琶湖の中に竜宮があって、湖水に入ることによって竜宮世界へと繋がっていることを表しているのである。その後、竜王の難儀を救った瀬戸都は竜宮に案内され、竜王の父である竜神から褒美に俵と金をもらい長者となった。

(二) 志度の浦

淡海公に命じられた海女が志度の浦から竜宮に赴き、面向不背の玉を取り返してきたという謡曲「海人」の玉取り説話は、黄表紙でもよく取り上げられている。

『名響鐘竜都』(北尾政美画、天明二年刊)では、これを踏まえて以下のような台詞が書かれている。

昔は志度の浦の海女などは竜宮へも心やすく行きしなれど、今では竜宮の大木戸までも行くことならねば、俺より他に竜宮へ行く道を知つた者は此世界に一人も無い。されば今では竜宮も昔の玉に懲りて用心厳しくなるく。たやすくは取返しがたし。竜宮へ取返しにやるものを指図してやるべし。(四ウ五オ。傍線引用者。以下同。)

主人公の和尚が竜宮に鯉節を取られてしまい、竜宮に行こうにも手段がないため、木曾の寢覚の里にある浦島の社へ行って拝みに行った。そこで浦島の神が現れてこのような台詞を述べるのである。玉取り説話の海女が竜宮に容易く行けたのに対し、今はその道を知る者も他にいないとしているところが面白い。

『通世界一代浦島』(飛田琴太作、古阿三蝶画、天明四年刊)でも、やはり海女が竜宮へ泳いで行く場面が登場する。物語冒頭で竜宮に取られた面光不背の玉を淡海公に取り返してくるようにな言われた海女は、「どんぶりこと飛び込み、寄せくる波を漕ぎ分けて、なんよゑと歌を歌いながら海底深く泳ぎ行」き(一オ)、「難なく竜宮まで泳ぎ着」くのであった(一ウ二オ)。

その後、物語は以下のように続く。竜宮では女の客は珍しいと歓待され、海女は難なく竜王から玉を返してもらい、

志度の浦に戻って淡海公と夫婦となる。淡海公は童王の親切に礼がしたいと考え、浦島太郎に相談に行くと、浦島と乙姫との間に生まれた浦吉を遣わすことになる。そして浦吉は亀に乗って竜宮へ赴くのだが、二代目乙姫に振られてしまい、子のない淡海公夫婦の養子となった。

『「面光不背」御年玉』(万象亭作、式上亭柳郊画、天明七年刊)では、謡曲「海人」の世界に河童を登場させ、玉を取り返す場面さらに面白味を加えている。それは例のごとく、淡海公に頼まれた海女が玉を取り返そうと海へ入るのだが、眼前の海面から玉が収められた玉塔が現れるのである。これは面光不背の玉を奪ってきた河童の河太郎の進言で、玉を盗まれないようにと、竜宮にある玉塔を三十丈から三百丈に伸ばしたところ、竜宮世界を突き抜けて海面へと出てしまったのだ。幸若舞曲「大職冠」や謡曲「海人」では、竜宮までの長い距離を泳ぎ、乳の下を切って玉を込めて帰ってきた海女だが、ここでは海女は難なく玉を取り返すことが出来るのである。その後玉を奪われた童王が激怒したため、河太郎が江戸へ玉を探しに行くという展開になっている。

謡曲「海人」に描かれた、志度の浦から竜宮まで泳いで行ったという海女は、黄表紙の題材として多く取られており、当時よく知られていた話であったことが窺える。

(三) 壇ノ浦

平家滅亡の地である長門国壇ノ浦は、竜宮と密接に関わっている土地である。『平家物語』灌頂卷「六道之沙汰」に記された、壇ノ浦の戦いの後、捕らえられた建礼門院時子が明石の浦で見たという夢の記述を見てみよう。

さて武士共にとらはれて、のぼりさぶらひし時、播磨国明石浦について、ちっとうちまどろみてさぶらひし夢に、

昔の内裏にははるかにまさりたる所に、先帝をはじめ奉って、一門の公卿殿上人、みなゆゆしげなる礼儀にて侍ひしを、都を出でて後、かかる所はいまだ見ざりつるに、『是はいづくぞ』と問ひ侍ひしかば、式位の尼と覚えて、『竜宮城』と答へ侍ひし時、『めでたかりける所かな。是には苦はなきか』と問ひさぶらひしかば、『竜畜経のなかに見えて侍ふ。よくく後世をとぶらひ給へ』と、申すと覚えて夢さめぬ。⁽⁷⁾

夢の中に安徳天皇や平家一門の人々が礼儀を正して現れたので、ここはどこかと尋ねると、二位の尼が竜宮城だと答えるのである。⁽⁸⁾

さらに、物語は前後するが、巻十一の安徳天皇入水の場面でも、二位の尼が「浪の下にも都のさぶらふぞ」と安徳天皇を慰めて共に入水したことが記されており、伝本によっては「竜宮城」と明記しているものもある。⁽⁹⁾ これら『平家物語』の記述により、壇ノ浦は早くから竜宮が想起される場所として定着していたことがわかる。

壇ノ浦と竜宮の繋がりは、黄表紙にも描かれている。『浦島が帰郷八島の入水』猿蟹速昔噺⁽¹⁰⁾（恋川春町作画、天明三年刊）では、浦島の故郷が壇ノ浦と設定され、竜宮はその壇ノ浦の海底にあるとしている。竜王の婿となっていた浦島太郎は故郷を思い出し、乙姫にしばしの暇乞いを申し出る。すると乙姫は玉手箱を開けて年を取っては困ると、玉手箱ならぬ味噌塩の入った玉開け箱を渡す。その頃、浦島の故郷である讃岐国（正しくは長門国）壇ノ浦は、源平の戦いの最中であった。平家は敗北し、安徳天皇をはじめ一門残らず底の水層となり、能登守平教経も隠岐太郎・次郎を小脇に抱え込んで海へ飛び込んでいた。浦島は亀の背に乗って故郷の壇ノ浦に浮かび出て、この戦の様子を見て驚く。一方竜宮では、乙姫が浦島を見送ったついでに汐干の景色を眺めていた。そこに、壇ノ浦で入水した平家の人々が蟹となって「壇ノ浦の海底を突き抜き、弾みきつて落ち」てくるのである（三ウ四オ）。乙姫は驚いた拍

子に生き肝を失ってしまう。

これまでの記述から、本作では壇ノ浦の海底の下に竜宮の世界があったとされていることがわかる。物語はその後、乙姫の生き肝が平家蟹の手から猿へ渡り、猿は生き肝を服す。すると乙姫の身振りが乗り移って浦島を追いかけ、浦島の逃げ込んだ寺の鐘に蛇体となって巻き付く。蛇の尾を教経蟹が切ると、中から乙姫の生き肝が出てきて、無事に乙姫の体に戻される。そして喜んだ乙姫の父七代竜王は、安徳天皇を八代竜王として迎えると結ぶ。平家蟹から猿蟹合戦、猿の生き肝を織り交せて、道成寺で締めくくっている。

さらに、『猿蟹遠昔』の結末にも見られた、竜宮に行った安徳天皇が竜王の婿になったという話は、他の草双紙作品にも見られる。例えば、合巻『福徳天長大黒柱』⁽¹⁾（万亭心賀作、歌川国貞画、天保十五（一八四四）—弘化二年（一八四五）刊）には、壇ノ浦で入水した安徳天皇と二位の尼が竜宮に助けられて、溺れない術を授けられ、安徳天皇は乙姫の婿になったという話が出てくる。本作ではその後、二位の尼が水底に映る月を標に海女の姿となって海を泳いで行くと、須磨の浦に浮かび出る。壇ノ浦から入水してたどり着いた竜宮は明石にも通じており、ここでは竜宮への入り口は一つではなく、その存在は広範囲に渡って海底世界に広がっていたと考えられていたことがわかる。

（四）大物の浦

大物の浦は、摂津国、現在の兵庫県尼崎市南東に位置し、平安時代末期以降港湾として発達した。この地は壇ノ浦の戦い以後、頼朝と対立した義経が都から落ちのびて西国へ向かおうとしたところ、暴風雨に遭って難船した場所として知られている。この嵐の原因を『平家物語』では平家の怨霊のためだとしているが、その後作られた謡曲「船弁慶」⁽²⁾（観世小次郎信光作）では、平知盛の亡霊のためだとしている。あらずじは、以下の通りである。

頼朝との確執により都落ちした義経一行は、大物の浦に着く。そこで弁慶は静を都へ帰すよう義経に進言し、泣く泣く別れを決意した静は門出を祝って舞を舞い、一行を見送った。義経一行が船出するとたちまち嵐となり、海上には平家一門の亡霊が現れる。平知盛の亡霊は長刀を手に義経に襲いかかってくるが、弁慶の祈祷により、怨霊は退散していくのであった。

義経に恨みを抱く知盛像は、その後浄瑠璃「義経千本桜」（二世竹田出雲・三好松洛・並木千柳作、延享四年（一七四七）十一月竹本座初演）にも引き継がれており、浮世絵などにも多く描かれている。⁽¹³⁾

『「舞謡」草紙曙』（豊里舟作、鳥居清長画、天明三年刊）は、羽衣伝説と義経伝説を題材にした黄表紙だが、大物の浦で平知盛の幽霊が義経を竜宮へ誘うという場面が描かれている。源義経は頼朝とのいざこざで九州へ落ちのびようと、船で大物の浦を通っていた。するとそこに知盛の幽霊が迎えに現れ、「竜宮へ御供申ける。これは安徳天皇を助けられし返礼なり」と言って義経を竜宮へと誘うのである（二ウ三オ）。挿絵には船に乗る義経一行の前に、引立烏帽子に直垂姿の知盛が波の上に現れている様子【図2】。そして義経は知盛と共に竜宮へ行き、竜王からもてなしを受ける。

こうして義経は知盛の亡霊に誘われて、大物の浦の海上から竜宮へ赴くのであった。ここで興味深いのは、知盛像の描かれ方の違いである。謡曲「船弁慶」や浄瑠璃「義経千本桜」で描かれる知盛は、義経に深い恨みを持っていたが、黄表紙でもてなしを受ける場面では、知盛が義経に「八嶋・壇ノ浦のいざはぐい流し、これから真の付き合いが肝心〜」と話しかけている（三ウ四オ）。さらに先に述べた竜宮へ誘う場面では、「安徳天皇を助けられた返礼に」



【図2】『草紙嚚』2ウ3オ 東京都立中央図書館加賀文庫所蔵

と言っている。この安徳天皇を助けたというエピソードは、「義経千本桜」を踏まえていると考えられるだろう。

「義経千本桜」二段目・渡海屋の段⁽¹⁵⁾では、平知盛や安徳天皇が実は生きていたという設定で、知盛は義経への復讐を果たすため船宿の主人銀平に身をやつしており、船出した義経一行を襲撃する。しかし義経はこれを見抜いており、敗戦を悟って入水しようとした安徳帝と典侍の局を助ける。そして知盛は帝を義経に託し、碇の縄を体に巻き付けて、最後に碇と共に海へ沈んでいくのである。この印象深い「碇知盛」の場面は、人形浄瑠璃や歌舞伎によって広く知られている。

黄表紙『草紙嚚』ではこの渡海屋の段を踏まえて、安徳帝を助けたお礼に義経を竜宮へと誘っていると考えられる。義経への恨みを抱いた人物というイメージの強い知盛だが、この義経への友好的な態度は黄表紙ならではの人物描写といえよう。またお礼として竜宮へ誘うという行為は、釣った亀を放して竜宮へと誘われた浦島太郎を彷彿とさせる。

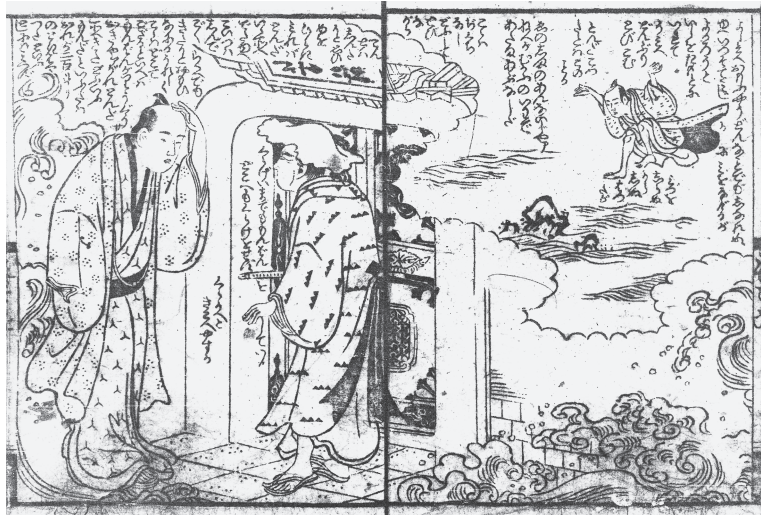
本作ではその後、蝦夷に渡ることを決めた義経に、竜王は天富という女性を見送りに遣わす。一方、天人の羽衣を拾っ

た漁師の白竜は、羽衣を返すために飛び歩いていたところ、義経の蝦夷行きを聞いて飛んでいた鞍馬天狗の常陸坊と道連れとなる。二人は、義経の都落ちの後山奥に隠れ住んでいた静御前と偶然出会い、静の身の上を聞いた白竜は、義経の元に送り届けて褒美をもらおうと考える。そして無事に静と蝦夷へ渡った白竜は、褒美として天富を妻にもらい、故郷高砂で父母に迎えられるのであった。

第二章 架空の場所

第一章で見てきたように、物語や伝承にちなんで竜宮を特定の場所に比定している例がある一方で、場所を特定しない形で竜宮を描いている作品も見られる。これはいわば架空の世界で、現代の私たちが持つ竜宮という異界のイメージに近いかもしれない。本章では、架空の場所として描かれている例を見ていきたい。

例えば、『浦島太郎』二度目の「竜宮」⁽¹⁶⁾（市場通笑作、鳥居清長画、安永九年（一七八〇）刊）は浦島太郎の後日談で、故郷へ戻って来た浦島太郎が渡された玉手箱を開けておじいさんになってしまったところから始まる。ここで帰ってきた場所は「故郷」と記されているのみで、故郷で浦島は「いつかふに知った者も無く、なるほど先祖の話に釣りに出られて帰らぬとの事、定めて南風で死なれたか、また何処の浦へござったか」とされていることから（一ウ二オ）、釣りに出たまま竜宮へ行ってしまったことがわかる。そして故郷に帰って困っている浦島を見た亀は、「竜宮へおいでなされ」と言って浦島を背に乗せて再び竜宮へ向かうのである（二ウ三オ）。本場面の挿絵では、大海の先に見える竜宮城に向かい、浦島太郎が大きな蓑亀に乗って波の上を進んでいく様子が描かれており、竜宮の所在が海を隔てた場所に設定されていることがわかる。



【図3】『齡長尺桃色寿主』6ウ7オ 東京都立中央図書館加賀文庫所蔵

竜宮が海に存在するという考え方は、他の作品にも見られる。『亀屋万年浦島栄』(深川錦鱗作、恋川春町画、天明三年刊)では、物語冒頭で浦島太郎の七世の孫たちが草双紙を読んで浦島が竜宮へ行ったことを知り、自分たちも訪ね行こうと相談する。そして彼らは「竜宮へ行くには海から行くといへば、これから海へ行って潜りを習おふ」と言って(一オ)、竜宮へ行くために素潜りの練習を始める。しかしそこに河童が現れ、海に引きずり込まれてしまう。ちょうどその頃竜宮から帰った浦島はこれを知り、河童を人質にして彼らを助けるのであった。

海から潜って竜宮へ行くという例をもう一つ見てみよう。『齡長尺桃色寿主』(甲亀作、鳥文斎栄之画、天明八年刊)は、東方朔の落とした桃を食べて寿命が延びた主人公の由兵衛が、寿命を縮めるために奮闘する話で、いくら努力しても反対に寿命が延びてしまう。そしていっそ手短かに身を投げたのがよからうと、石を袂に入れて海に飛び込むと、竜宮の門の前にたどり着くのであった。挿絵の右上には由兵衛が海に飛び込む様子と、左側には竜宮の門の前で門番くらげと話す

様子が描かれている【図3】。先に志度の浦の例として挙げた『名響鐘竜都』の冒頭にも、「そもく竜宮界と申は海底の王城にして繁華の地なり」と記されており（一オ）、黄表紙では広く竜宮が海底にあると考えられていたことがわかる。

以上のように、黄表紙では具体的な地名は設定されずに、竜宮の所在が海にあるとしている例が多く見られる。また、想像の世界の竜宮は、海底にあるというイメージが強いことも窺える。

さらに、竜宮に関わる様々なキャラクターを登場させている作品もある。そこで描かれるのが、浦島太郎、依藤太、玉取り説話に登場する淡海公、猿の生き肝の話で知られる猿やくらげなどである。『大違宝舟』⁽¹⁹⁾（芝全交作、北尾重政画、天明元年刊）ではこの竜宮に関連する者たちが、それぞれの事情から再び竜宮へ行きたいと願い、皆で竜宮に向かうことにする。その行程は、初め猪牙舟に乗って二万里ほど行き、その後亀の駕籠かきに乗ってようやく竜宮にたどり着くのである。依藤太は琵琶湖、玉取説話の海女は志度の浦と、それぞれの物語から想像される地名が異なるために、話を綯い交ぜに作る黄表紙では、具体的な地名に当てはめることが少ないのではないかと考えられる。

第三章 具体的な場所―時事的な話題を取り込む

(一) 中洲

黄表紙では竜宮とは直接関わりのなさそうな地名や場所も、竜宮の世界に取り込んでいる。ここでは、時事的な話題を取り込んだ具体的な場所の例を見ていこう。『箱入娘面屋人魚』⁽²⁰⁾（山東京伝作、北尾重政画か、寛政三年（一七九一）刊）は、浦島太郎と竜宮の遊女との間に生まれた人魚を題材とした話だが、物語は以下のように始まる。

鴨長明が方丈の記に、行く川の流れば絶えずして、しかも、もとの水にあらざ、淀みに浮かぶ泡沫は、かつ消へ、かつ結びて、久しくとどまる事なし、とは昔建暦年中の台詞なれど、寛政の今に至りても、五分程も違ひなく、よく当てなされた。嘘は中洲新地も、再び元の流れとなる事、淵は瀬となり、瀬は淵となり、覗機関の変はるよりも早く、これと定め難きは、げに浮世の有様なり。ヨ、それよ、かう理屈臭く言ふのではなかつた。さて右の如く、昨日まで人間界の領分にありし中洲も、今日はたちまち竜宮の支配所となりければ、まづ波を踏固めのため、竜王より御赦しにて、見世物・芝居・水茶屋・楊弓場などをしつらひ、新地なりし時の賑ひに、おさ
〈劣らぬ繁昌なり。〉
(一ウ一オ)

このように本作は、昨日まで人間界であった中洲が、竜宮の支配所になったという設定で書かれている。さて、この中洲という場所がどうして竜宮になったのか、詳しく見ていこう。中洲とは、隅田川と箱崎川の分流点にあった三俣と呼ばれる浅瀬を、明和八年(一七七二)に埋め立てて作られた町のことである。

『武江年表』(斎藤月岑著、嘉永二―三年(一八四九―五〇)刊)の安永元年の項には以下のような記述がある。

大川中洲新地築立成就す。町屋は安永四年に至りて全く成れり(其の地は新大橋より南の方、酒井家白須家菅沼家御屋敷前通り川岸凡そ三丁余り、坪数九千六百七十七坪余り、茶屋九十三軒有り。其の内、四季庵と云ひしは北東の隅の料理屋にて、殊に大厦也しとぞ。湯屋は三軒あり。其の余の家数知るべからず。安永四年より天明八年迄十四年の間也。この間中洲のみ賑ひ、両国橋前後の地至りて淋しくなりしが、寛政己来元のごとし)。



【図4】『箱入娘面屋人魚』1ウ2オ 東京都立中央図書館加賀文庫所蔵

隅田川西岸、新大橋の南側のこの場所は、安永元年には埋め立てが完了し、安永四年には町屋が建てられた。その広さ九千六百七十七坪、約三・二ヘクタールの中に、九十三軒余りの茶屋が立ち並び、とても賑わっていたという。

大田南畝の随筆『平日閑話』にも、「安永五年丙申、此夏大橋三つまたの築出し新地殊の外繁昌也。茶屋、みせ物など賑ひ兩國に倍せり」とあり、中洲が茶屋や見世物などで繁昌していたことが記されている。

これを踏まえて、『箱入娘面屋人魚』では「竜王より御許しにて、見世物・芝居・水茶屋・楊弓場などをしつらひ、新地なりし時の賑はひに、おさく／＼劣らぬ繁昌なり」と、人間が治めていた頃のように、竜宮の支配下となった中洲でも茶屋や見世物小屋が建てられて繁昌したとしている。挿絵には、楊弓場や蛤の蜃気楼を見せる見世物小屋が立ち並び、頭に魚を乗せた姿の竜宮界の人々で賑わっている様子が描かれている【図4】。

そして物語は以下のように展開する。浦島太郎は竜王の娘、乙姫の男妾となっていたが、近頃乙姫に飽きて、密かに竜宮の

世界として復活した中洲の茶屋に通っていた。そこで美しいお鯉の出会い、二人の間に子供が出来る。しかし生まれた子は人魚の姿で、浦島は不憫に思いつつ海に捨てるのであった。その後人間界に流れ着いた人魚を、釣舟の平次という男が拾い女房にする。金に困っている平次を人魚は気の毒に思い、恩返しに花魁となって奉公するが、体が魚ということどうまく行かず、すぐに家に戻ってきてしまう。そこで今度は寿命が延びるとうたった「人魚なめ」という商売を始めるとたちまち繁昌し、調子に乗った平次は人魚をなめすぎて子供になってしまふ。そこに浦島が現れ、玉手箱の威徳で丁度良い男盛りの年になり、人魚も脱皮して人間の女性となり、夫婦長生きして暮らしたという。

ところで、黄表紙や洒落本には中洲に取材した作品が多く見られる。洒落本『中洲雀』（道楽散人無玉作、安永六年序）では、中洲が完成して繁栄する様子が書かれているが、「されば竜宮のこゝに出現したるがごとく、乙姫も川に泛て此土にも竜宮有しかと疑ふ」と形容している。竜宮と中洲を関連させた早い例として注目される。

また、天明七年十一月九日の火災で吉原が焼けた際に設けられた、中洲の仮宅を舞台にしている作品も多い。仮宅が設けられたのは、天明七年の暮れから八年にかけてのことで、隅田川を挟んで仮宅の出来た中洲と両国は大いに賑わったという。例えば洒落本『中洲の花美』（内新好作、天明九年刊）や黄表紙『奇事きじ中洲話ちゅうしゅうわ』（山東京伝作、北尾政美画、寛政元年刊）には、中洲の仮宅の様子が描かれている。

しかし繁昌した中洲も、寛政元年十月には取り払われてしまふ。『武江年表』寛政元年の項には「十月より始まり、大川筋其の外川々御普請、中洲築地取払せられ、翌年に至り元の水面となる」と記されている。

中洲が取り払われた理由は、何だったのだろうか。多田光氏によると、この年の八月八日、関東一帯に暴風雨が襲来し、大川筋、深川辺りは大洪水に見舞われたが、この水害の原因は中洲埋め立てによる川幅の縮小だと考えられたという。⁽²⁴⁾『江戸名所図会』（斎藤長秋・莞斎・月峯著、天保五十七年刊）にも、「洪水のとき、便りあしきとて、寛政

元西年に至り、また元のごとく川に掘り立てらる⁽²⁵⁾とあり、洪水が原因であったことが記されている。

結局、中洲新地があったのは十四年という短い期間であった。『箱入娘面屋人魚』では、この十四年という短い期間を、『方丈記』の冒頭を引用し、「視機関の変はるよりも早く」変化したと表現している。そして、刊行の前年に取り払われた中洲に題材を取り、掘り返して川に戻ったところが竜宮の支配下となって繁華街となったとしているのである。作者の京伝は、当時話題となっていた場所を巧みに作品世界へ取り込んでいたことがわかる。

(二) 江戸の掘り抜き井戸

時事的な話題を取り込んだ例をもう一つ見てみたい。『金生水洞幹』⁽²⁶⁾（十返舎一九作画、寛政九年刊）には、江戸で掘った掘り抜き井戸が竜宮に通じたという話が出てくる。この掘り抜き井戸についても当時の時事的な事物であった。本作は、江戸という場所以上の具体的な地名は特定できないが、江戸に密着した時事的な話題を取り込んだ例として挙げる。

そもそも、掘り抜き井戸とは何だろうか。『守貞謄稿』（喜多川守貞著、天保八―嘉永六年成立）には以下のように記されている。

江戸もまた海変じて陸となる地多きをもつて、井水塩気ありて、市民これを患ひとし、遠所にこれを求むも□□
て上水を制すこと、上巻に詳らかなり。また、江戸も掘抜井あり。これは玉川および井の頭の水にあらず。地軸
を貫きて清水を涌出せしむものなり。その制、尋常の井のごとく桶側を重ね、根側と云ふ最下の側底に一穴を穿
ち、これに節を貫きたる竿竹筒を立て、地中若干尋に及び、清水を呼ぶなり。⁽²⁷⁾

大阪では井戸水に塩気を含んでいたが、江戸の町も普通の井戸の水では塩気を含んでいたため、飲み水の確保は重要であった。そこでより深い地軸を貫いて地下水を涌出させる方法が選ばれるようになった。それが掘り抜き井戸である。

この掘り抜き井戸が江戸で普及するまでの過程は、『武江年表』に記されている。

掘貫井の事、昔は更になし。中古より（其の始め不詳）始まりたれど、武家にはこれなし。其の価、凡そ金三、四百両を費やしける故、市中には大商家ならでは掘らざりしが、天明の頃にや、大坂より井戸掘工来り、簡易の法を以て速やかに掘り、価も又下直なり。近頃は江戸中掘抜井多くなり、町毎に大かたこれあり。

当初は費用が高く、大商家でないと掘ることが出来なかったが、大坂から簡易的な方法が伝わり、コストも安く抑えられるようになった。すると江戸で普及し始め、町毎に見られるようになったという。『金生水洞幹』一ウ二オや『穿幹吹出笑』（橋香保留作、寛政十一年刊）一ウ二オの挿絵には、櫓を組んで井戸を掘る光景が描かれている。

ここで改めて『金生水洞幹』のあらすじを見てみたい。物語冒頭は以下のように始まっている。

いづれの掘り抜きにや、すぼんと抜けた所が地獄と竜宮の境へ穴を空けたり。元より地獄は世界の地の底にて、
竜宮は海の底なれば、地獄と竜宮は隣同士にて、普段心やすく互いに心やすく義理時宜をする仲なり。この度
両国の境に大きなる穴空きければ、双方の役人立ちやいて改めけるに、「何の穴ともわからず、この上に金山も



【図5】『金生水洞幹』2ウ3オ 東京都立中央図書館加賀文庫所蔵

なければ、金掘りの技でもあるまじ、もぐらも地ならば上へ
 持ち上げるはず、いかさまにも怪しき穴かな」と評議まち
 くなる所へ、傍らより河童這い出でて、「これこそ掘り抜き
 きお井戸のすつぽりと抜けたる也。さて素人にしては良
 く掘りました」と感心する。（二ウ三オ）

江戸で掘り抜き井戸を掘っていたら、地獄と竜宮の境に穴を空
 けたというのである。挿絵には、「ちごく ごくらく領」「竜宮
 領」と書かれた碑が描かれ【図5】、この場所が地獄と竜宮の境
 であることがわかる。この発想は本文に記されている通り、地獄
 が世界の地の底にあり、竜宮も海の底にあるという考えによるも
 のだろう。掘り抜き井戸を掘ったらその穴が地獄まで通じたとい
 う趣向は、後に刊行された『穿幹吹出笑』にも用いられている。
 掘った井戸が竜宮に通じるといふ考え方は、既に元禄十六年
 （二七〇三）刊の浮世草子『好色敗毒散』（夜食時分作）に見られ
 る。本作は好色物の短編集で、目録部分には各話にまつわる短い
 文章が添えられているが、巻一「愛染堂」に、「よい事ばかりか
 さねるづつの紋所心中はほりぬき竜宮までもとゞいた君さま」と

書かれている。遊女を指す「君さま」の、真心は掘り抜き井戸を掘って竜宮まで届くほど深い、というのである。⁽³⁰⁾ 本
作が刊行された大坂は、江戸よりも早く掘り抜き井戸が普及しており、地下深く掘ると水が湧き出ることを知った当
時の人は、地下には竜宮のある海が広がっていたと考えたのだろう。

『金生水洞幹』の話の続きを見てみよう。掘り抜き井戸の穴が地獄と竜宮に達してしまったことにより、地獄では
井戸から幽霊が娑婆へ出やすくなり、竜宮では心中する男女が井戸に身投げならぬ、身上げするようになる。これを
危惧した地獄と竜宮は、井戸に底を入れて錠前を下ろし、交代で番をしていたのだが、ある時この井戸に雷が落ちて
くる。その時竜宮の者に怪我人が出てしまったため、彼らは鬼の姿の雷を打擲し、雷をかばう地獄の馬達と揉める。
しかし最終的に鬼を天上に戻すために皆で協力し、極楽からは後光や紫の雲を借り、竜宮からは竜に水を巻き上げさ
せて雨を降らせると、雷を無事に天上へ戻すことが出来た。ところで、掘り抜き井戸が方々に出来たことで、地獄と
竜宮は明るくなり、両国の家老はこれは日本のお陰だと言って、返礼を考える。その結果、海川の廃れていた金銀を
井戸の下に掃き寄せておくことで、地上の井戸からは水と共に金銀が汲み上げられるようになる。そして「この通り
だからどなたも掘り抜きをなさりませ」とめでたく結ぶ。

『金生水洞幹』は、当時増えていた掘り抜き井戸に題材を取り、その井戸が竜宮や地獄に通じていたという展開に
発展させたところに面白味がある。

おわりに

以上、本稿では黄表紙において竜宮がどのような場所に描かれているかを見てきた。黄表紙では琵琶湖や志度の浦

のように、先行する物語や伝承によって竜宮へ繋がる地名が特定されている例も見られる。その一方で、具体的な地名が設定されずに、主に大海や海底にある想像の世界として描かれた作品も多い。その理由としては、黄表紙に様々な物語を取り入れた結果、特定の地名を設定することが困難になり、想像上の架空の地としていることが考えられる。また、挿絵入りの黄表紙の影響により、徐々に竜宮の所在が海底にあるというイメージが強くなっていったことも注目されるだろう。

さらに、中洲新地や江戸の掘り抜き井戸など、当時話題となっていた場所を竜宮へと繋がる舞台として選んでいるということも、黄表紙ならではの創作といえるだろう。掘り返されて元の海に戻った中洲や、地中深くまで掘削する掘り抜き井戸と竜宮世界を繋げたことは、戯作者たちの発想力の豊かさが表れているように思われる。

【付記】

本稿をなすにあたり、図版掲載のご許可を賜りました東京都立中央図書館に深く御礼申し上げます。
 なお、黄表紙『流行謡混雑唱舞』（はやりうたとりこみしやうぶ）（美足齋象睡作、勝川春朗画、寛政元年刊）には、佐渡の海から竜宮へ行くという場面があり、本作も時事的な話題を取り込んだ例として見出したが、今回はその題材となっている流行謡「新保幸大寺」について調査が不十分であるため、割愛した。今後さらに調査を続けたい。

【注】

- (1) 鈴木健一編『海の文学史』（三弥井書店、二〇一六年）所収。
- (2) 竜宮の黄表紙の探索は、主に棚橋正博『黄表紙総覧』（青裳堂書店、一九八六―一九五年）を用いた。
- (3) 東京都立中央図書館加賀文庫本（函四二―二）及び、国立国会図書館所蔵本（二〇七―一九）を参照した。
- (4) 国立国会図書館所蔵本（二〇八―四九二）を参照した。

- (5) 国立国会図書館所蔵本(二〇八一—三三八)を参照した。
- (6) 『江戸の戯作絵本(二) 全盛期黄表紙集』(現代教養文庫、一九八一年)を参照した。
- (7) 『平家物語』の引用は、『新編日本古典文学全集46 平家物語②』(小学館、一九九四年)に拠る。
- (8) 問答の相手は、引用した語り本系の覚一本では二位の尼となっているが、読み本系の延慶本や『源平盛衰記』では平知盛となっている。
- (9) 安徳天皇の入水場面についての詳細な考察は、佐々木紀一「波の下の都」(松尾葦江編『海王宮—壇之浦平家物語』三弥井書店、二〇〇五年)に詳しい。
- (10) 舞鶴市教育委員会系井文庫所蔵本を参照した。『猿蟹遠昔噺』の翻刻は、中村正明「恋川春町作黄表紙『浦嶋が帰郷八島の入水』猿蟹遠昔噺」—翻刻と注釈—(『國學院大學大学院 文学研究科論集』二九号、二〇〇二年三月)があり、さらに趣向に関しての詳細な考察に、同氏「黄表紙『浦嶋が帰郷八島の入水』猿蟹遠昔噺』考—素材と趣向について—」(『日本文学論究』六二冊、二〇〇三年三月)がある。
- (11) 国立国会図書館所蔵本(二〇七—一〇二五)を参照した。
- (12) 『新編日本古典文学全集59 謡曲集②』(小学館、一九九八年)を参照した。
- (13) 能から浄瑠璃への展開は、日置貴之『義経千本桜』碇知盛(鈴木健一編『浜辺の文学史』、三弥井書店、二〇一七年)に詳しい。
- (14) 東京都立中央図書館加賀文庫本(函八〇—一八)を参照した。
- (15) 『新日本古典文学大系93 竹田出雲・並木宗輔浄瑠璃集』(岩波書店、一九九一年)を参照した。
- (16) 東京都立中央図書館加賀文庫本(函二八一—一一)を参照した。『二度目の竜宮』の翻刻及び本文の考察は、三好修一郎「黄表紙『浦島太郎 二度目の竜宮』について」『叢』二二号、二〇〇〇年六月)に詳しい。
- (17) 国立国会図書館所蔵本(二〇八—五一一)を参照した。
- (18) 東京都立中央図書館加賀文庫本(函四二—二〇)を参照した。
- (19) 『新日本古典文学大系83 草双紙』(岩波書店、一九九七年)。
- (20) 『山東京傳全集 黄表紙2』(ぺりかん社、一九九三年)。

- (21) 『武江年表』の引用は、『増訂武江年表』一・二（東洋文庫、一九六八年）に拠る。
- (22) 『大田南畝全集』十一卷（岩波書店、一九八八年）。
- (23) 『洒落本大成』七卷（中央公論社、一九八〇年）。
- (24) 多田光「中洲」（『洒落本大成』十八卷月報、中央公論社、一九八三年）。
- (25) 『新訂江戸名所図会』一（ちくま学芸文庫、一九九六年）。
- (26) 東京都立中央図書館加賀文庫本（函六〇―一三）を参照した。なお、本作の雷像に焦点を当てた論考には、三上匠「十返舎一九黄表紙『金生水洞幹』攷―雷像をめぐる―」（『武蔵文化論叢』六号、二〇〇六年三月）がある。
- (27) 『近世風俗志』一（岩波文庫、一九九六年）。
- (28) 図版は、早稲田大学図書館古典籍総合データベース（く13 02946 0177）参照。
- (29) 『新編日本古典文学全集』65 浮世草子集（小学館、二〇〇〇年）。
- (30) 解釈は前掲注29書の頭注を参照した。